



8月 ちとせだより

「子どもの仕事は遊び」という言葉が聞かれなくなって久しい気がします。子どもは遊ぶことを通して成長するという意味です。また「放っておいても子は育つ」という言葉も、今の時代ではきっと通用しない言葉なのでしょう。親や大人が子どもを放っておいても、子どもが育つ環境が、以前は家庭や地域社会の中にあつたのですが、今の時代は子どもを取り巻く環境は大きく変化し、子どもにとって様々な成長に必要な刺激を受けて育つ環境がどこにでもあるとは限らないのです。

子どもの遊び自体も大きく変化しています。「放っておいても子は育つ」と言われた時代には、地域の中に異年齢の子どもの集団があり、また何も無い所でも子どもたちは様々な工夫をして遊びを展開していました。かくれんぼや鬼ごっこといった直接子ども同士が触れ合う遊び、また小川やため池で水遊びをしたり、ザリガニ捕り、葉っぱや木の枝といった自然の事物などを使ってごっこ遊びをしていました。子どもたちは、「～ちゃん遊ぼう」と言って家々を回って一緒に遊ぶ友だちを誘い出していました。そんな中で子どもたちはわくわく、どきどきしながら心と頭と体をいっぱい使って育っていきました。

しかし、現代では、遊びそのものもお金の対価としての商品となっているもので溢れています。前に座っているだけで楽しめるビデオやテレビ、そしてコンピューターゲーム等は、より鮮明によりリアルになり、遊ぶ仲間を探す必要もなく、子どもたちを魅了します。そして、このような現代の遊びが及ぼす影響は、どんどん他者との関わりを希薄にし、結果的には社会そのものから孤立してしまう人間を生み出しているのではないのでしょうか。現代人の課題は人間関係にあるとも言われるように、引きこもりの状態にある人間の数は70万人を超え、また不登校児は11万7千人を超えていると言われていています。もちろん、この中には様々な課題を抱えていて、社会の側の無理解によって、生きづらい状況におかれている人々も含まれるわけですが、これなども他者の気持やその人の置かれている状況を理解しようとしてもしない人間社会が原因となっているように思います。

どんな時代であっても、子どもは遊びを通して様々なことを学ぶわけですが、一番何を学ぶのかというと他者との関わり方を学ぶと言っても良いのかも知れません。いつも相手の主張を受け入れているだけでは自分の本当にしたいことは出来ないわけで、ある時には相手の意に反していても自分の気持を主張することが出来なければならぬでしょうし、またそれを相手に伝えるタイミングもあるわけです。そういった能力は、いくら本を読んで勉強しても身につかない能力であって、ある時には友だちに意地悪を言ってしまうたり、また言われて傷ついたりしながら身につけていくものなのです。

子どもたちが、他の子どもに興味を持ち遊びを通しての関わりを求めていく幼児期にこそ、大人の価値観とは異なる、子ども同士の自由な関わりを大切にしたいと思います。